

[成果情報名] 秋冬どりネギのネギアザミウマに対する省力的で低コストな防除体系

[要約] 秋冬どりネギの主要害虫であるネギアザミウマは、定植時、ネギアザミウマの急増期、急増期1ヶ月後、収穫1ヶ月前に防除することにより、寄生密度を低く維持でき、省力的に低コストで防除できる。

[キーワード] ネギアザミウマ、防除体系、秋冬どりネギ

[担当] 秋田農技セ農試・生産環境部

[代表連絡先] 電話：018-881-3330

[区分] 東北農業・基盤技術（病害虫）

[分類] 普及成果情報

[背景・ねらい]

東北地方の主要野菜であるネギ栽培において、近年ネギアザミウマの被害が深刻となっている。ネギアザミウマの個体数は盛夏期に急激に増加し、いったん多発してしまうと防除効果が上がらないため、品質低下による収益減に加えて防除回数増加による労働負担も大きくなる。ネギアザミウマを防除するには寄生密度を低く維持する管理が重要となるが、現場では防除体系が確立していない。

そこで、発消長を踏まえ、生育初期からネギアザミウマの寄生密度を低く抑える省力的で低コストな防除体系について検討を行う。

[成果の内容・特徴]

1. ジノテフラン水溶剤の定植時ペーパーポット灌注処理は、処理後43～75日寄生密度を低く抑えることができる（図1（左）、図2、図3）。
2. ネギアザミウマの急増期にベンフラカルブマイクロカプセル剤を散布することにより、処理後20日程度は寄生密度を低く抑えられる（図1（中）、図2、図3）。
3. 寄生密度が増加する急増期散布1ヶ月後にダイアジノン乳剤を散布することにより寄生密度を低く維持できる（図1（右）、図2、図3）。
4. 収穫物への被害を回避するため、収穫1ヶ月前頃にクロチアニジン水溶剤を散布することにより、収穫物の品質を確保することができる（図1（右）、図2、図3、表1）。
5. 上記の防除体系の導入により生育初期からネギアザミウマの寄生密度を低く抑えることができる（図2、図3）。また、薬剤防除の回数が半減し、散布に係る労働負担も大幅な軽減が期待できる。さらに、薬剤費の削減も可能である（表1）。

[普及のための参考情報]

1. 普及対象 秋冬どりねぎ生産者
2. 普及予定地域・普及予定面積 秋田県内 200ha
3. その他
 - (1) 急増期とはネギアザミウマの寄生数が急激に増加する時期であり、秋田県では例年7月中旬～下旬である。
 - (2) 秋冬どり作型とは、秋田県における長ネギの主要作型であり、4月上旬～5月中旬にチェーンポットに播種し、5月上旬～6月下旬に定植、10月～12月にかけて収穫するものである。

[具体的データ]

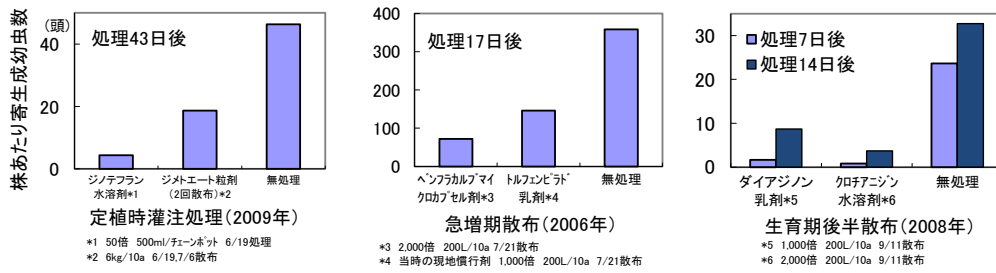


図1 ネギアザミウマに対する各薬剤の防除効果

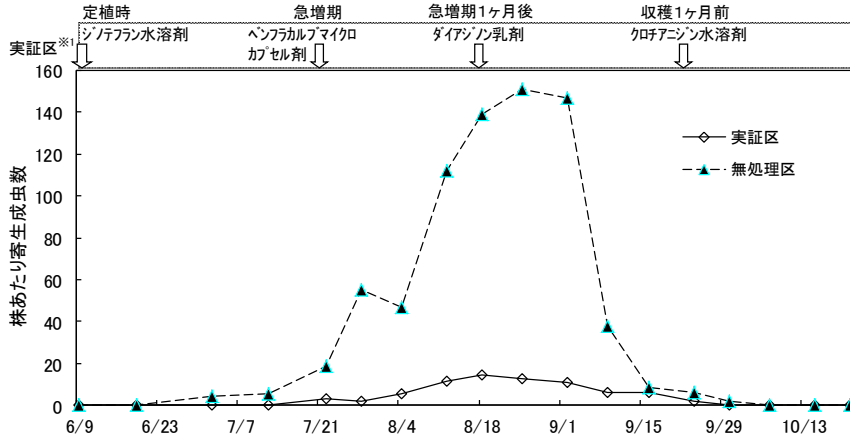


図2 ネギアザミウマ寄生成虫数の推移(2010年 秋田市(農試圃場))

耕種概要

品種:吉蔵、播種:4月19日、定植:6月9日、
収穫:10月24日、区制:1.3m²/区、3連制

ネギアザミウマの発生状況:多発生

※1 試験区の薬剤散布履歴

6/9 ジノテフラン水溶性剤 50倍 500ml/チェーンホット
7/22 ベンフラカルブマイロカプセル剤 1,000倍 200L/10a
8/18 ダイアジノン乳剤 1,000倍 200L/10a
9/24 クロチアニジン水溶性剤 2,000倍 200L/10a

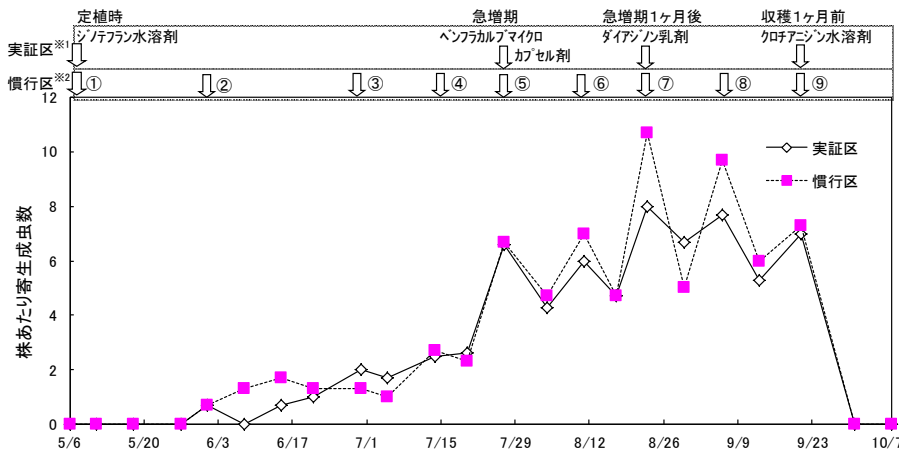


図3 ネギアザミウマ寄生成虫数の推移(2010年 能代市(現地))

耕種概要

品種:夏扇パワー、播種:3月25日、定植:5月6日、
収穫:10月20日、区制:1.3m²/区、3連制

ネギアザミウマの発生状況:中発生

※1 試験区の薬剤散布履歴

5/6 ジノテフラン水溶性剤 50倍 500ml/チェーンホット
7/27 ベンフラカルブマイロカプセル剤 1,000倍 200L/10a
8/23 ダイアジノン乳剤 1,000倍 200L/10a
9/21 クロチアニジン水溶性剤 2,000倍 200L/10a

※2 慣行区の薬剤散布履歴

① 5/6 ジメトエート粒剤 6kg/10a
② 6/1 ジメトエート粒剤 6kg/10a
③ 6/30 マラソン乳剤 2,000倍 150L/10a
④ 7/14 ダイアジノン乳剤 1,000倍 200L/10a
⑤ 7/27 シベルメトリン乳剤 2,000倍 200L/10a
⑥ 8/11 ペルメトリン乳剤 3,000倍 200L/10a
⑦ 8/23 ダイアジノン乳剤 1,000倍 200L/10a
⑧ 9/6 アセタミプリド水溶性剤 2,000倍 200L/10a
⑨ 9/21 クロチアニジン水溶性剤 2,000倍 200L/10a

表1 収穫物の被害度、秀品率、防除回数および薬剤費

区	2010年農試圃場		2010年能代市(現地)			2011年能代市(現地)			10aあたり薬剤費 ^{*3} (円)
	被害度 ^{*1}	秀品率 ^{*2} (%)	被害度 ^{*1}	秀品率 ^{*2} (%)	防除回数	被害度 ^{*1}	秀品率 ^{*2} (%)	防除回数	
実証区	2.7	84	8.5	92	4	4.5	90	4	12,700
慣行区	—	—	9.5	88	9	—	—	—	13,200
無処理区	57.0	24	—	—	—	—	—	—	—

※1 発生予察事業の被害度の算出方法に準拠

※2 収穫時50株におけるA品の割合

※3 現地JAの販売価格による

(秋田県農林水産技術センター農業試験場)

[その他]

研究課題名:ネギのネギアザミウマに対する効率的防除体系の構築

予算区分:県単

研究期間:2006~2011年度

研究担当者:菊池英樹、高橋良知